カーライル博物館

夏目漱石

公園の片隅に通りがかりの人を相手に演説をしている者がある。向うから来た釜形（かまがた）の尖（とが）った帽子を被（か）ずいて古ぼけた外套（がいとう）を猫背（ねこぜ）に着た爺（じい）さんがそこへ歩みを佇（とど）めて演説者を見る。演説者はぴたりと演説をやめてつかつかとこの村夫子（そんぷうし）のたたずめる前に出て来る。二人の視線がひたと行き当る。演説者は濁りたる田舎調子（いなかちょうし）にて御前はカーライルじゃないかと問う。いかにもわしはカーライルじゃと村夫子が答える。チェルシーの哲人（セージ）と人が言囃（いいはや）すのは御前の事かと問う。なるほど世間ではわしの事をチェルシーの哲人（セージ）と云うようじゃ。セージと云うは鳥の名だに、人間のセージとは珍らし

いなと演説者はからからと笑う。村夫子はなるほど猫も杓子(しゃくし)も同じ人間じゃのにことさらに哲人(セージ)などと異名(いみょう)をつけるのは、あれは鳥じゃと渾名(あだな)すると同じようなものだのう。人間はやはり当り前の人間で善(よ)かりそうなものだのに。と答えてこれもからからと笑う。

余は晩餐前に公園を散歩するたびに川縁(かわべり)の椅子(いす)に腰を卸して向側を眺(なが)める。倫敦(ロンドン)に固有なる濃霧はことに岸辺に多い。余が桜の杖に頤(あご)を支(ささ)えて真正面を見ていると、遥(はる)かに対岸の往来(おうらい)を這(は)い廻る霧の影は次第に濃くなって五階立(だて)の町続きの下からぜんぜんこの揺曳(たなび)くものの裏(うち)に薄れ去って来る。しまいには遠き未来の世

を眼前に引き出したるように窈然たる空の中にとりとめのつかぬ鳶色の影が残る。その時この鳶色の奥にぽたりぽたりと鈍き光りが滴るように見え初める。三層四層五層共に瓦斯を点じたのである。余は桜の杖をついて下宿の方へ帰る。帰る時必ずカーライルと演説使いの話しを思いだす。かの溟濛たる瓦斯の霧に混ずる所が往時この村夫子の住んでおったチェルシーなのである。

　カーライルはおらぬ。演説者も死んだであろう。しかしチェルシーは以前のごとく存在している。否彼の多年住み古した家屋敷さえ今なお儼然と保存せられて

ある。千七百八年チェイン・ロウが出来てより以来幾多の主人を迎え幾多の主人を送ったかは知らぬがとにかく今日(こんにち)まで昔のままで残っている。カーライルの歿後は有志家の発起(ほっき)で彼の生前使用したる器物調度図書典籍を蒐(あつ)めてこれを各室に按排(あんばい)し好事(こうず)のものにはいつでも縦覧(じゅうらん)せしむる便宜(べんぎ)さえ謀(はか)られた。

文学者でチェルシーに縁故のあるものを挙(あ)げると昔(むか)しはトマス・モア、下(くだ)ってスモレット、なお下ってカーライルと同時代にはリ・ハントなどがもっとも著名である。ハントの家はカーライルの直(じき)近傍で、現にカーライルがこの家(いえ)に引き移った晩尋ねて来たという事が

カーライルの記録に書いてある。またハントがカーライルの細君にシェレーの塑像(そぞう)を贈ったという事も知れている。このほかにエリオットのおった家とロセッチの住んだ邸(やしき)がすぐ傍(そば)の川端に向いた通りにある。しかしこれらは皆すでに代(だい)がかわって現に人が這入(はい)っているから見物は出来ぬ。ただカーライルの旧盧(きゅうろ)のみは六ペンスを払えば何人(なんぴと)でもまた何時(なんどき)でも随意に観覧が出来る。

チェイン・ローは河岸端(かしっぱた)の往来を南に折れる小路でカーライルの家はその右側の中頃に在(あ)る。番地は二十四番地だ。

毎日のように川を隔(へだ)てて霧の中にチェルシーを眺(なが)めた余はある朝ついに橋を渡ってその有名なる庵(いお)りを叩(たた)いた。

庵りというと物寂(ものさ)びた感じがある。少なくとも瀟洒(しょうしゃ)とか風流とかいう念と伴(ともな)う。しかしカーライルの庵(いおり)はそんな脂(やに)っこい華奢(きゃしゃ)なものではない。往来(おうらい)から直(ただ)ちに戸が敲(たた)けるほどの道傍(みちばた)に建てられた四階造(づくり)の真四角な家である。

出張った所も引き込んだ所もないのべつに真直(まっすぐ)に立っている。まるで大製造場の煙突の根本を切ってきてこれに天井を張って窓をつけたように見える。

これが彼が北の田舎から始めて倫敦へ出て来て探しに探し抜いて漸々の事で探し宛てた家である。彼は西を探し南を探しハンプステッドの北まで探してついに恰好の家を探し出す事が出来ず、最後にチェイン・ローへ来てこの家を見てもまだすぐに取きめるほどの勇気はなかったのである。四千万の愚物と天下を罵った彼も住家には閉口したと見えて、その愚物の中に当然勘定せらるべき妻君へ向けて委細を報知してその意向を確めた。細君の答に「御申越の借家は二軒共不都合もなき様 被存 候えば私倫敦へ上り候迄双方共御明け置願度 若し又それ迄に取極め候必要相生じ候節は御

一存にて如何（いかが）とも御取計らい被下度候（くだされたくそろ）とあった。カーライルは書物の上でこそ自分独（ひと）りわかったような事をいうが、家をきめるには細君の助けに依らなくては駄目と覚悟をしたものと見えて、夫人の上京するまで手を束（つか）ねて待っていた。四五日（しごんち）すると夫人が来る。そこで今度は二人してまた東西南北を馳（か）け廻った揚句の果（はて）やはりチェイン・ローが善（い）いという事になった。両人（ふたり）がここに引き越したのは千八百三十四年の六月十日で、引越の途中に下女の持っていたカナリヤが籠（かご）の中で囀（さえず）ったという事まで知れている。夫人がこの家（いえ）を撰（えら）んだのは大（おおい）に気に入ったものかほかに相当なのがな

くてやむをえなんだのか、いずれにもせよこの煙突のごとく四角な家は年に三百五十円の家賃をもってこの新世帯の夫婦を迎えたのである。カーライルはこのクロムウェルのごときフレデリック大王のごとき製造場の煙突のごとき家の中でクロムウェルを著わしフレデリック大王を著わしディスレリーの周旋(しゅうせん)にかかる年給を擯(しりぞ)けて四角四面に暮したのである。

余は今この四角な家の石階の上に立って鬼の面のノッカーをコツコツと敲(たた)く。しばらくすると内から五十恰好(かっこう)の肥った婆さんが出て来て御這入(おはい)りと云う。最初から見物人と思っているらしい。婆さんはやがて名

簿のようなものを出して御名前をと云う。余は倫敦滞留中四たびこの家に入り四たびこの名簿に余が名を記録した覚えがある。この時は実に余の名の記入初(きにゅうはじめ)であった。なるべく丁寧に書くつもりであったが例に因(よ)ってはなはだ見苦しい字が出来上った。前の方を繰りひろげて見ると日本人の姓名は一人もない。して見ると日本人でここへ来たのは余が始めてだなと下らぬ事が嬉しく感ぜられる。婆さんがこちらへと云うから左手の戸をあけて町に向いた部屋に這入る。これは昔し客間であったそうだ。色々なものが並べてある。壁に画(え)やら写真やらがある。大概はカーライル夫婦の肖

像のようだ。後ろの部屋にカーライルの意匠に成ったという書棚がある。それに書物が沢山詰まっている。むずかしい本がある。下らぬ本がある。古びた本がある。読めそうもない本がある。そのほかにカーライルの八十の誕生日の記念のために鋳たという銀牌と銅牌がある。金牌は一つもなかったようだ。すべての牌と名のつくものがむやみにかちかちしていつまでも平気に残っているのを、もろうた者の煙のごとき寿命と対照して考えると妙な感じがする。それから二階へ上る。ここにまた大きな本棚があって本が例のごとくいっぱい詰まっている。やはり読めそうもない本、聞いた事

のなさそうな本、入りそうもない本が多い。勘定をしたら百三十五部あった。この部屋も一時は客間になっておったそうだ。ビスマークがカーライルに送った手紙と普露西（プロシア）の勲章がある。フレデリック大王伝の御蔭と見える。細君の用いた寝台（ねだい）がある。すこぶる不器用な飾（かざ）り気（け）のないものである。

　案内者はいずれの国でも同じものと見える。先（さ）っきから婆さんは室内の絵画器具について一々説明を与える。五十年間案内者を専門に修業したものでもあるまいが非常に熟練したものである。何年何月何日にどうしたこうしたとあたかも口から出任（でまか）せに喋舌（しゃべ）っている

ようである。しかもその流暢（りゅうちょう）な弁舌に抑揚があり節奏（せっそう）がある。調子が面白いからその方ばかり聴いていると何を言っているのか分らなくなる。始めのうちは聞き返したり問い返したりして見たがしまいには面倒になったから御前は御前で勝手に口上を述べなさい、わしはわしで自由に見物するからという態度をとった。婆さんは人が聞こうが聞くまいが口上だけは必ず述べますという風で別段厭（あ）きた景色（けしき）もなく怠（おこた）る様子もなく何年何月何日をやっている。

余は東側の窓から首を出してちょっと近所を見渡した。眼の下に十坪ほどの庭がある。右も左もまた向う

も石の高塀で仕切られてその形はやはり四角である。四角はどこまでもこの家の附属物かと思う。カーライルの顔は決して四角ではなかった。彼はむしろ懸崖の中途が陥落して草原の上に伏しかかったような容貌であった。細君は上出来の辣韮のように見受けらるる。今余の案内をしている婆さんはあんぱんのごとく丸るい。余が婆さんの顔を見てなるほど丸いなと思うとき婆さんはまた何年何月何日を誦し出した。余は再び窓から首を出した。

カーライル云う。裏の窓より見渡せば見ゆるものは茂る葉の木株、碧りなる野原、及びその間に点綴する

勾配(こうばい)の急なる赤き屋根のみ。西風の吹くこの頃の眺(なが)めはいと晴れやかに心地よし。

余は茂る葉を見ようと思い、青き野を眺(なが)めようと思うて実は裏の窓から首を出したのである。首はすでに二返(へん)ばかり出したが青いものも何にも見えぬ。右に家が見える。左(ひだ)りに家が見える。向(むこう)にも家が見える。その上には鉛色(なまりいろ)の空が一面に胃病やみのように不精無精(ふしょうぶしょう)に垂れかかっているのみである。余は首を縮めて窓より中へ引き込めた。案内者はまだ何年何月何日の続きを朗らかに読誦(どくじゅ)している。

カーライルまた云う倫敦(ロンドン)の方(かた)を見れば眼に入るもの

はウエストミンスター・アベーとセント・ポールズの高塔の頂（いただ）きのみ。その他幻（まぼろし）のごとき殿宇（でんう）は煤（すす）を含む雲の影の去るに任せて隠見す。

「倫敦の方」とはすでに時代後れの話である。今日（こんにち）チェルシーに来て倫敦の方を見るのは家の中（うち）に坐って家の方（かた）を見ると同じ理窟（りくつ）で、自分の眼で自分の見当（けんとう）を眺めると云うのと大した差違はない。しかしカーライルは自（みずか）ら倫敦に住んでいるとは思わなかったのである。彼は田舎（いなか）に閑居して都の中央にある大伽藍（だいがらん）を遥（はる）かに眺めたつもりであった。余は三度（みた）び首を出した。そして彼のいわゆる「倫敦の方」へと視線を延ばした。

しかしウェストミンスターも見えぬ、セント・ポールズも見えぬ。数万の家、数十万の人、数百万の物音は余と堂宇との間に立ちつつある、漾（ただよ）いつつある、動きつつある。千八百三十四年のチェルシーと今日のチェルシーとはまるで別物である。余はまた首を引き込めた。婆さんは黙然（もくねん）として余の背後に佇立（ちょりつ）している。

三階に上（あが）る。部屋の隅を見ると冷やかにカーライルの寝台（ねだい）が横（よこた）わっている。青き戸帳（とばり）が物静かに垂れて空（むな）しき臥床（ふしど）の裡（うち）は寂然（せきぜん）として薄暗い。木は何の木か知らぬが細工（さいく）はただ無器用で素朴であるというほかに何らの特色もない。その上に身を横えた人の身の上も思

い合わさるる。傍（かたわ）らには彼が平生使用した風呂桶（ふろおけ）が九鼎（きゅうてい）のごとく尊げに置かれてある。

　風呂桶とはいうもののバケツの大きいものに過ぎぬ。彼がこの大鍋（おおなべ）の中で倫敦の煤（すす）を洗い落したかと思うとますますその人となりが偲（しの）ばるる。ふと首を上げると壁の上に彼が往生（おうじょう）した時に取ったという漆喰製（しっくいせい）の面型（マスク）がある。この顔だなと思う。この炬燵（こたつ）櫓（やぐら）ぐらいの高さの風呂に入（はい）ってこの質素な寝台の上に寝て四十年間やかましい小言（こごと）を吐き続けに吐いた顔はこれだなと思う。婆さんの淀（よど）みなき口上が電話口で横浜の人の挨拶を聞くように聞える。

宜(よろ)しければ上りましょうと婆さんがいう。余はすでに倫敦の塵(ちり)と音を遥(はる)かの下界に残して五重の塔の天辺(てっぺん)に独坐するような気分がしているのに耳の元で「上りましょう」という催促を受けたから、まだ上があるのかなと不思議に思った。さあ上ろうと同意する。上れば上るほど怪しい心持が起りそうであるから。

四階へ来た時は縹渺(ひょうびょう)として何事とも知らず嬉しかった。嬉しいというよりはどことなく妙であった。ここは屋根裏である。天井を見ると左右は低く中央が高く馬の鬣(たてがみ)のごとき形(かた)ちをしてその一番高い背筋(せすじ)を通して硝子(ガラス)張りの明り取りが着いている。このアチッ

クに洩(も)れて来る光線は皆頭の上から真直(まっすぐ)に這入(はい)る。そうしてその頭の上は硝子一枚を隔てて全世界に通ずる大空である。眼に遮(さえぎ)るものは微塵(みじん)もない。カーライルは自分の経営でこの室(しつ)を作った。作ってこれを書斎とした。書斎としてここに立籠(たてこも)った。立籠って見て始めてわが計画の非なる事を悟った。夏は暑くておりにくく、冬は寒くておりにくい。案内者は朗読的にここまで述べて余を顧(かえ)りみた。真丸(まんまる)な顔の底に笑の影が見える。余は無言のままうなずく。

カーライルは何のためにこの天に近き一室の経営に苦心したか。彼は彼の文章の示すごとく電光的の人で

あった。彼の癇癖は彼の身辺を囲繞して無遠慮に起る音響を無心に聞き流して著作に耽るの余裕を与えなかったと見える。洋琴の声、犬の声、鶏の声、鸚鵡の声、いっさいの声はことごとく彼の鋭敏なる神経を刺激して懊悩やむ能わざらしめたる極ついに彼をして天に最も近く人にもっとも遠ざかれる住居をこの四階の天井裏に求めしめたのである。

彼のエイトキン夫人に与えたる書翰にいう「此夏中は開け放ちたる窓より聞ゆる物音に悩まされ候事一方ならず色々修繕も試み候えども寸毫も利目無之夫より篤と熟考の末家の真上に二十尺四方の

部屋を建築致す事に取極め申候（そろ）是は壁を二重に致し光線は天井より取り風通しは一種の工夫をもって差支（さしつかえ）なき様致す仕掛に候えば出来上り候（そろ）上は仮令（たとい）天下の鶏共一時に鬨（とき）の声を揚げ候（そろ）とも閉口仕（つかまつ）らざる積（つもり）に御座候（そろ）」

　かくのごとく予期せられたる書斎は二千円の費用にてまずまず思い通りに落成を告げて予期通りの功果を奏したがこれと同時に思い掛けなき障害がまたも主人公の耳辺（じへん）に起った。なるほど洋琴（ピアノ）の音（ね）もやみ、犬の声もやみ、鶏の声、鸚鵡の声も案のごとく聞えなくなったが下層にいるときは考だに及ばなかった寺の鐘、汽

車の笛(ふえ)さては何とも知れず遠きより来(きた)る下界の声が呪(のろい)のごとく彼を追いかけて旧のごとくに彼の神経を苦しめた。

声。英国においてカーライルを苦しめたる声は独逸(ドイツ)においてショペンハウアを苦しめたる声である。ショペンハウア云う。「カントは活力論を著(あらわ)せり、余は反(かえ)って活力を弔(とむら)う文を草せんとす。物を打つ音、物を敲(たた)く音、物の転(ころ)がる音は皆活力の濫用にして余はこれがために日々苦痛を受くればなり。音響を聞きて何らの感をも起さざる多数の人我説(わがせつ)をきかば笑うべし。されど世に理窟(りくつ)をも感ぜず思想をも感ぜず詩歌(しいか)をも感

ぜず美術をも感ぜざるものあらば、そは正にこの輩(やから)なる事を忘るるなかれ。彼らの頭脳の組織は麁獷(そこう)にして覚(さと)り鈍き事その源因たるは疑うべからず」カーライルとショペンハウアとは実は十九世紀の好一対(こういっつい)である。余がかくのごとく回想しつつあった時に例の婆さんがどうです下りましょうかと促(うなが)す。

一層を下(くだ)るごとに下界に近づくような心持ちがする。冥想(めいそう)の皮が剝(は)げるごとく感ぜらるる。階段を降り切って最下の欄干に倚(よ)って通りを眺(なが)めた時にはついに依然たる一個の俗人となり了(おわ)ってしまった。案内者は平気な顔をして厨(くりや)を御覧なさいという。厨は往来(おうらい)よりも

下にある。今余が立ちつゝある所よりまた五六段の階を下らねばならぬ。これは今案内をしている婆さんの住居(すまい)になっている。隅に大きな竈(かまど)がある。婆さんは例の朗読調をもって「千八百四十四年十月十二日有名なる詩人テニソンが初めてカーライルを訪問した時彼ら両人はこの竈の前に対坐して互に煙草(たばこ)を燻(くゆ)らすのみにて二時間の間一言(ひとこと)も交(まじ)えなかったのであります」という。天上に在(あ)って音響を厭(いと)いたる彼は地下に入っても沈黙を愛したるものか。

最後に勝手口から庭に案内される。例の四角な平地を見廻して見ると木らしい木、草らしい草は少しも見

えぬ。婆さんの話しによると昔は桜もあった、葡萄(ぶどう)もあった。胡桃(くるみ)もあったそうだ。カーライルの細君はある年二十五銭ばかりの胡桃を得たそうだ。婆さん云う「庭の東南の隅を去る五尺余の地下にはカーライルの愛犬ニロが葬むられております。ニロは千八百六十年二月一日に死にました。墓標も当時は存しておりましたが惜しいかなその後取払われました」と中々精(くわ)しい。

　カーライルが麦藁帽(むぎわらぼう)を阿弥陀(あみだ)に被(かぶ)って寝巻姿のまま啣(くわ)え煙管(ぎせる)で逍遥(しょうよう)したのはこの庭園である。夏の最中(もなか)には蔭深き敷石の上にささやかなる天幕(テント)を張りその下に机をさえ出して余念もなく述作に従事したのはこの

庭園である。星明（あきら）かなる夜（よ）最後の一ぷくをのみ終りたる後、彼が空を仰いで「嗚呼（ああ）余が最後に汝（なんじ）を見るの時は瞬刻の後（のち）ならん。全能の神が造れる無辺大の劇場、眼に入（い）る無限、手に触（ふ）るる無限、これもまた我が眉目を掠（かす）めて去らん。しかして余はついにそを見るを得ざらん。わが力を致せるや虚ならず、知らんと欲するや切なり。しかもわが知識はただかくのごとく微（び）なり」と叫んだのもこの庭園である。

余は婆さんの労に酬（むく）ゆるために婆さんの掌（てのひら）の上に一片（いっぺん）の銀貨を載（の）せた。ありがとうと云う声さえも朗読的であった。一時間の後倫敦（ロンドン）の塵（ちり）と煤（すす）と車馬の音と

テームス河とはカーライルの家を別世界のごとく遠き方（かた）へと隔（へだ）てた。

底本：「夏目漱石全集2」ちくま文庫、筑摩書房
　　１９８７（昭和62）年10月27日第1刷発行
底本の親本：「筑摩全集類聚版夏目漱石全集」筑摩書房
　　１９７１（昭和46）年４月～１９７２（昭和47）年１月
入力：柴田卓治
校正：LUNA CAT
２０００年８月31日公開
２００４年2月26日修正
青空文庫作成ファイル：
このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫

(http://www.aozora.gr.jp/) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。